

「読むこと」と「書くこと」の関連学習

—— 高校三年生の論文指導を通して ——

堀 江 マサ子

1 はじめに

「論文を高校生に書かせることができる。」という仮説に立ってこの研究は始まる。高校生の実態として一般的には、「書くことをおっくがるし、書いたにしても誤字や当て字が多く、文章もまともがない。」(注1)といわれている。しかし、私の書くことの授業において、そういう生徒はほとんどいなかった。人生の中で一番多感で、心が柔かな、可能性に満ちているこの時期の生徒に、溢れる感動を呼びおこし、表現の形を暗示してさえやれば、そこに生き生きとした文章表現は生まれる、と信じて論文の指導を思ったのである。指導にあたっては、詩の単元では私の詩や詩人論を、小説、評論の単元では私の書いた小説や評論を紹介し、古典を教える際も私の書いた「平安女性日記文学の精神——『かげろふ日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』——」をプリントして講義するなど、教師自身の書く生活を常に示し、心の交流を密にすることを心がけた。

2 実践の内容

1 指導目的

高校生に

- ① 卒業論文(構想のしっかりとした長い文章(四百字詰原稿用紙三十枚(百枚程度))を書かせること。
- ② 読むことと書くことの関連を密にさせること。
- ③ 書くことの厳しさと喜びとを体験させること。
- ④ 書くことによって自己を見つめことばを見つめて、自己の内面的飛躍を生み出させること。

を目的とした。特に①と②を指導者の意識的目的とし、③④の目的は付随的に生徒に体得させるものとした。

2 指導経過

過去約十年の教員生活において、三度、三年生を一年生の時から持ちあがりて卒業させた。一、二年での「読むこと」と「書くこと」の関連学習の上に立って、三年生で論文(四百字詰原稿用紙三十枚から百枚程度)を書かせて提出させた。以下各回毎の指導の概要を説明する。

・ 第一回目

① 卒業年度 昭和46年(23回生)

② 対象クラス 就職希望の多い古典のクラス女子49名。クラスの概

観は、現代国語、古典とも一年から三年まで私の持ちあがりの生徒たちばかりである。授業だけでなくいろいろな面で互いの心が通い合っており、指導しやすしい生徒たちであった。各時間の授業ノート（輪番で授業記録とその感想とその他悩みなどを書かせ、私もそれについての批評、感想などを書いたもの）も深い内容のものがあり、独自の表現力を持つ生徒も数名いた。「自分の可能性を確める意味で卒業論文（生徒に書く意欲を持たせるため、指導の時はこのことばを使った。）を書いてみないか。」という私の提案を素直に全員が受け入れたクラスであった。

③指導方法

まず古典の作品の中から自分の好きな作品を一つ選んで通読し、感想を四百字詰原稿用紙五枚程度にまとめて提出させる。一方、全体指導として、論文の書き方の五つの枠組、

イ、仮説法（仮説を立てて証明していく方法）。

ロ、ことは（特定の）を分析して書く（全体の見とおしに立っ

た）。

ハ、作品の流れに沿って感想を交えながら書く。

ニ、評論ふうに自由に書く。

ホ、イ、ニをいろいろ組み合わせて書く。

を示し、生徒各自にどの枠組で書くか決めさせ、章立てのしかた、カード法の概要を知らせておいた。次に生徒提出の感想文に私が論文構成上重要と思われる所に傍線を施し、個人面接の話し合いにより、どの枠組で書くか、章立ての細かい点、カード法の実際などを具体的に指導した。たとえば、五つの枠組の中で一番多かった仮説

法について言えば、いくつかの仮説を感想文の中から抜き出して、生徒にカードを取らせ、分類させていくように指導した。二期期になって、論文の中間発表会をし、他の生徒からの質疑により高次なものへと発展させるとともに、聞いている生徒も同じ悩みなどを出し合うことにより、各自の論文への取り組みの深まりともなった。提出は三学期期末試験の古典の時間。なお、教科書の古典の指導は、他のクラスと同じように行われていたので、生徒にはかなりな負担になったと思う。

事後指導として、各論文に対する読後感を書き、また全体への感想として「35HRの皆さんへ」という文章を書いて卒業式の日に配布した。それは次のようなものである。

「御卒業おめでとうございます。最初皆さんの論文を手にした時、喜びがこみあげてきました。そして今なおその余韻は私の心の中に尾をひいております。一つ一つの論文を読んでいくに従って、愛、人生、人間、自然、旅、芸術、など皆さんの切々たる生の声に、心が拓かれていく思いでした。その純粹さと真剣さにうたれました。最後の時間にも話したように、その純粹さ、真剣さは、これからは生活のためにけずられそうになったり、社会の渦に消されそうになったり、また、自分でなくしてしまいうるさうになったりするのです。そういう時、この論文に貫かれている精神を思い出して何とかして打ち勝ってほしいと思います。純粹な心の源泉として、この論文をいつも心の片隅に暖めておいてほしいと思います。」

あとがきや最後のテストの時に書いてもらった「三年間の古典生

活をふりかえって」などを読んで、いろいろな苦勞の跡が手にとるようになりました。私も大学時代同じような論文の苦しみを味わいました。でも今になっては、それらすべてが苦しかたけれど楽しい思い出として心の中に浮かんできます。論文を書く苦しきは、不毛な苦しみではない。創造の苦しみなのです。社会へ出てからの苦しみや、人と人とのつながりの苦しみの中には、何と生活の皺のような不毛な苦しみが多いことでしょう。それに比べて、論文を書くことの苦しきは、その背後に暖かい孤独の充実を伴うものです。こういう孤独を大切にしてくださいね。

それから、内容の深さと表現力の充実におどろきました。自分自身のことは自分自身でなかなかわかりにくいものですが、一年の初めに書いた、市立生になって、という作文と読み比べてみるとわかれると思います。思考の深まりと同時に、そこには思考過程の推敲の跡がうかがわれます。中には大学の論文と比較しても決して恥かしくないものもありましたよ。自信をもって、第二論文、第三論文を書き続けてくださいね。

最後に一言わびなければならぬのは、評価人数に制限があるのと、皆さんに良い評価を与えることができなかったことです。一人一人に対しての評価も、多く書いた人と少ししか書けなかった人がある点です。それでも論文を二回以上は読んだのですよ。これからも真心をこめて一編一編読みなおしていきたいとおります。いつでもお元気でね。

2月28日

堀江マサ子

評価はABC(少し良いもの(A)ⓐⓑ)として古典の成績の中に入

れた。その後昭和47年3月に出された現行指導要領「第2章第1節 国語第2款各科目第1の2内容のC書くこと」の(1)のアイウエオカキコノ項目別にABCの評価をしたり、各生徒の三年間の古典と現代国語の成績、学年全教科約五百人中の順位と論文の評価との相関を研究したりしたが、決定的なものも得られなかった。

・第二回目

①卒業年度 昭和49年(26回生)

②対象クラス 就職希望の多い現代国語のクラス女子30名。第一回目とほぼ似通ったクラスであるが三年生になって初めて教える生徒もいた。現代国語の各週の初めの時間に生徒は順番に自分の好きな詩や短歌、小説の一節などを後の黒板に書いて紹介スピーチをする等、三十名という少人数だから綿密な指導もできたクラスである。

③指導方法、対象作品を外国文学、日本文学を問わず自由に選ばせた以外は、ほとんど第一回目の時と同じである。

・第三回目

①卒業年度 昭和52年(29回生)

②対象クラス 第一回目、第二回目の指導で、「論文を高校生にも書かせることができる。」という仮説の確証を得たので、今度は私の受け持った古典Ⅱのクラス全部(三クラス、女子のみ百三十二名)を対象を拡げた。私の教科担任に初めてなる生徒は少なかった。進学者希望者が多かったが、授業態度、論文(感想文集)に取り組み姿勢は以前の指導クラス同様真剣であった。

③指導方法 授業に即した指導である。「読むこと」の上に立った「書くこと」の指導である。指導要領改訂にともない古典Ⅱの古文

の指導は、当校では「古典Ⅱ（古文）源氏物語 秋山虔編 筑摩書房」を教科書としての源氏物語指導となった。各単元の「読むこと」の指導後に、感想文か論文を提出させ、私が添削し（その都度二、三のいい作品は授業時に紹介した）、それを清書させ三学期末に提出させた。「読むこと」の指導では教科書にはいる前に、源氏物語のあらすじをプリントして配り、系図をつくりながら説明し、物語の概要をつかませた。教科書での指導において、第一部の初めは解釈や文法などに重点を置き、「薄雲」から第二部にかけては登場人物の心の動きや作者の物語作成の意図等を中心に移した。第三部では（訳はプリントして与えたが）授業での解釈、文法はほとんど行わないで、古典語そのまま生徒は源氏の世界のイメージづくりができるように指導した。

事後処理として、各単元一名ずつの感想文（各巻別の人）をプリントして卒業式の日に配布した。

三 生徒提出作品の分析

生徒提出の卒業論文は二百編にも及ぶので、ここでは顕著なものを紹介することにする。

1 M子の場合（第一回目提出のもの）

提出論文の題名は「真夏の孤独——和泉式部日記——」である。その目次は、

序	1～12
第一章「顔」	13～46

第二章「空間」	47～64
第三章「つれづれ」	65～82
結び	83～84
ひとり言	85～88
参考文献	89～90

である。「序」の一部を紹介すると、

「源氏物語絵巻」の吹き抜き屋台様式のように、斜めに位置した「女」。画面の何割かを、ほんやり霞んだ雲で包み、その余韻と、そのうえの執着を思わせる全文。四季の香と彩を思わせる和歌。それらの融合の中であって、式部の筆が紅色の炎となっているのである。

炎。それは、黒い宇宙の中に生を感じる、式部の息であり、全の腐物を燃えつくす作用にすぎない。哀れなまでに激しく燃えようとすると、彼女の表面に対し、不安と、あせりと、動揺が、それらを掻きたてる。式部自身の生活する位置の不安定さ、一つの愛に溺れる、女の弱さ、そして第三者の声。それらは、彼女をあんなにも赤く燃えさせた炎の裏に沈むものなのだ。（中略）

式部の世界には、一つの冷たい、橋があるようだ。どんなに長い道を、来ても、暖かい抱擁を、得てきても、その橋に至れば、冷たく、突き離してしまふ。彼女には、そんな強さがあるのだ。それは、式部自身の、生理的なものであろう。その橋があるがために、彼女にとって、愛に終止はないのだ。つまり、

終止の前に、そこを渡り、渡った後は、次の愛の中に居る。そんな彼女なのではなからうか。式部は、愛、そのものに、自分を売り払ってはいないのである。(中略)

和泉式部の底辺を流れるもの。それは、真夏の孤独である。哀愁とか、郷愁とかいった流れの緩い、ものではない。静と動の、前後した、それである。(中略) 真夏の孤独。その存する世界は、一瞬間の静止である。(中略)

この王朝の文学にあって、近代的な愛を知り、愛をも超越する何かを持っていた、式部。彼女の隠れた哲学を、私のものに、したいものだ。(P141~48) 注2

論題、章題のつけ方や右の文章からもわかるように、自分独自の文章スタイルを持った生徒である。感受性の鋭い獨創性のある生徒である。ことは選びの的確さと読点の多い文スタイルには、彼女の迫ってくるような心の躍動がある。短い文表現、体言止めにも強烈な個性が感じられる。読み取ったもの一つ一つを自分の心にくぐらせての表現には、M子の生命が息づいている。学力テストでは中位に位置する生徒であるが、和泉式部の表面を炎ととらえ、底辺を流れるものを真夏の孤独ととらえ、その愛を近代的な愛とするように、個性的読みの持ち主である。比喩表現の巧みさにも定着性がある。

最初M子が選んだ作品は「徒然草」であり、書く枠組としては「二、評論ふうに自由に書く。」ということであった。一学期間試みてどうしてもできないということ、[和泉式部日記]に変えたので

ある。自意識の強い、それでいてそれを押さえてHR委員になるなど指導力のある生徒であるから、和泉式部に自己の投影を見たのであろう。積極的に生きていく姿勢は、第三章「つれづれ」の所で、一学期間研究した「徒然草」を、「和泉式部日記」との比較でうまく生かして得ている。

論文の概要は「顔」では、和泉式部の特徴を1己れを含めた周囲を客観視すること、2己れを一つの平面に残さないとし、式部の持つ顔を四つに分類(1日記の「筆者」としての彼女。2和泉式部の脳の中核を成すべき姿であり、式部の底辺に生ずる動力源としての「女」の顔。3「女」の指令により行動し実行する「式部」としての顔。41~3三者を全て含み、なおかつ愛の不安定さと他に対する連帯感により生きる顔。)し、それら四つの顔の結合、変化一致を仮説を立て、問題点をカード法により分類して説明している。実証性はあるがM子の個性が消されているようにも思われた。「空間」では「和泉式部の持つ空間は時間に加えて感情と自然の美が伴うものである、それ故、空間は和泉式部自身が時の流れに乗りつつ、創造していくものでなければならぬ。P47~410」と書き、1愛2動揺3逃避・求愛と、空間を三つに分けている。その展開の様子を評論ふうに書き、「空間。それは自らを愛の中に陶醉させ、動揺を経て、逃避求愛により自らを探索し、追い求めて、再び愛に向う姿勢である。P62~63」と結んでいる。M子の最もM子らしい論構成であり、本文とマッチさせれば定着性のある評論となると思う。次に、「つれづれ」では、吉田兼好の消極的つれづれに比し、和泉式部については情熱的積極的つれづれと把握し、現代人と同じ

次元まで和泉を接近させている。

式部と兼好を比較してみると、二者とも「つれづれの地は孤独の有する世界」だとみている。そして孤独感がいずれも、絶望的暗さを持たない、暖かいものであるようだ。しかし同じ言葉を用いたにせよ、その意味する所は違っていた。兼好の孤独は、単なる安らぎで、全ての自らに無いものを含む所であった。式部の孤独がどうであるかといえば、まず自身が孤独という文学的繊細な動作を有していたのである。また、兼好が死を意識していたそれであるのに対し、式部においては、死の影すら見られない。彼女には、全く死を寄せつけない情熱があり、生き生きとした裸の人間の鋭さがある。(中略)つまりプロセスの段階であって、結果とか悟りの空間ではないのである。兼好のつれづれは、式部と反した地であった。兼好の「静」に対し式部の「動」があった。それ故兼好には、古びた、退屈さがあるが式部のそれには、期待と興奮を充分感じさせるだけの若さがあるのである。(P73 P81)

比較の内容の一面性には問題があるにしろ、M子の性格から、彼女の捉えた兼好のつれづれにはついて行けず、和泉式部に移っていた跡がここからうかがえる。「序」の文章スタイルと比べると変化があるのは、彼女が論文を書き進めていくにしたがって、表現から内容に重点が移ったのと、参考文献を多く読んだからであろう。論文としてはまだ仮説にすぎず、「徒然草」をもう少し研究した上

で比較すると実証性のある力強いものとなると思う。式部の方も「つれづれ」の形式を第一章の四つの顔や第二章の三つの空間に分けてカードを取り分類していくと、つれづれの質の微妙なちがいでてくるし、各章間の連関もつけられ、論文が総合的になると思われる。

「結び」では、和泉を現代人と同じと考えている。「ひとり言」では「私は、この論文を書く前の意気込みとして(式部の全てを否定してやろう!)」と思っていた。しかしみごとに破れ、かえって彼女の世界へ吸い込まれてしまう結果となってしまったのである。P87

2 S子の場合(第二回目提出のもの)

提出論文の題名は「車輪の下」で、その目次は次のとおりである。

。はじめに……………	1
。序節……………	9
。第一章 「車輪の下」の意味を考える……………	17
。第一節 第一の考え……………	19
。第二節 第二の考え……………	22
。第三節 本に書かれていることを考える……………	28
。第四節 まとめ……………	35
。第二章 ハンスが若くして一生をおえてしまったことを追究する……………	45
。第一節 大人たちのため……………	48

・第二節	母親がいなかったため……………	71	81
・第三節	友人ハイルナーの影響……………	82	96
・第四節	水の美しさにひかれて……………	97	99
・第五節	まとめ……………	100	103
・第三章	「クヌルプ」との比較……………	105	124
・第一節	「クヌルプ」のあらすじ……………	105	111
・第二節	「車輪の下」と「クヌルプ」との比較……………	112	124
・第四章	ヘッセとヘッセの主義・理想……………	125	152
・第一節	作者ヘルマン・ヘッセについて……………	125	136
・第二節	ヘッセの主義・理想について……………	137	147
・第三節	まとめ……………	148	152
・おわりに	……………	153	157

S子はM子とは対照的に、グループ学習の時は必ず書記をし、この論文も後輩のためにという私の提案に二部書いて提出したことからもうかがえるように、謙虚で着実で、学力テストの成績もやや上の部に属する生徒である。一五九ページにもおぼる枚数、目次だけでもその論文の概要がわかる章立ての仕方、順を追って克明に叙述していく書き方にもそれがわかる。私の指導したとおりに仮説を立てて、こつこつとカードをとり文献にもあたり論を進めている。「あとがき」の中からその一部を引用すると、

今の気持ちは、ああやっとなあとがきを書くまでに至ったんだなあ、という気持ちです。(中略)、第三・四章を書くのには

とても苦労しました。一時間かかっても二〜三行しか書いてなかったり、十分ぐらい、どう書いたらいいのか考えこんだりして、とにかくたいへんでした。(中略)

私は「車輪の下」という小説をあまりに悲劇的に考えすぎていたように思います。この本の中にも、たとえば勉強している時、絶望的な気持ちになることもたびたびありましたが、同時にまた奪われた子ども達の遊び以上に植うちのある時間をここで味わうこともあったように、私がめき出した「ハンスの喜び」は五ヶ所ありました。この論文を書くにあたって、よくこの本を読むまでは、(中略)ハンスの喜びなど書かれていたことすら、読んだあとの私の心には残りませんでした。(P133〜P155)

(傍線は堀江が施したものである。)

S子の右の気持ちは、論文を書く者が必ずくぐる濾過器のようなものである。また、傍線部の発見は、彼女の綿密な読みと「ハンス」をまじめに捉えようとする読みの姿勢から生まれたものである。彼女の綿密な読みは、論文全体を貫いているが、別の例をあげると、第一章「車輪の下」の意味を考えるにおいても、第一節で作品全体から感じとったものを仮説として述べ、第二節では辞典で「車輪」の項目を引き、日本語の辞典である限界と、英語のモオムとの対比で考えている。第三節ではさらに「車輪の下」の作品の中から「ハンスが神学校の寄宿舎に入っている時、ハイルナーという少年の影響によって自分自身に目ざめ、以前のように勉強への意欲がなくなつた時、神学校の校長先生がハンスに対して言ったことは

「疲れきってしまわないようにすることだね。そうでないと車輪の下じきになるからね。P(上)110、112」は、この本の中に出てくる唯一の「車輪の下」という題名の解釈を促す会話です。P28、46、29、44と「車輪の下」ということばを抜き出し解釈の手がかりとし、自分なりの結論を出している。第四節では「でも、私は、高橋先生(訳者)の「教育という車輪の下じき」ということばを、この意味を私なりに考える前に知らなくてよかったです。P44、47」と、訳者の意見に賛同しながらも自分の思考過程を大切にしている。など、彼女の綿密な読みと着実な叙述の方法が感じられる。P42、44、47と、まじめにものごとを捉えようとするS子の読み方そのものが、作品の読み取り方にもなり、確実な論構成、着実な叙述をも生み出させるのである。読むことが、その個性にあった書くことを決定するものである。付点の部分を説明すると、「車輪の下」に魅かれる多くの生徒は、

彼をここまでおいやった残酷なおとなたちの思想の根本はなんであらうか。おそらく「学歴の有無ですべてが決まる。」という誤った考えではないだろうか。はたして学歴によって、仕事も人格も社会的存在も決まってしまつて良いものなのだろうか。人間の一生とは、そんな安っぽく、薄べらかな簡単なものなのだろうか。そしてその誤った考えをそのまま実際のものとして受けとめている社会の人々を、私は悲しく思う。(考える読書18読書感想文中学・高校の部 毎日新聞社P57上13、23)

のように「車輪の下」を捉える。「学歴の有無ですべてが決まる。」という残酷なおとなたちの思想によって、ハンスが自滅に至ったと、この生徒は読みとり、それに反発している。(S子は自滅へのわけを大人たちのため、母親がいなかったため、友人ハイルナーの影響、水の美しさにひかれて、と仮説を立て、カードをとり、着実に読みとっている)。「車輪の下」に魅かれる生徒の多くは、右の生徒と同じように、勉強することの重さに耐え切れないで、それを回避し、ハンスが自滅へと至る過程に安心する、カタルシス的に「車輪の下」を読むのである。それに対し、S子は「ヘッセは『自分をみつめ、自分を傷ることなく生きる』と私たちに訴えていると同時に、自分の体験を通してさまざまな人間のようにすを作品にすることにより、私たちに意見し慰めを与えてくれるように思うのです。P110、115」とハンスと自分を同一化することなく、「車輪の下」が読者に与える効用を理性的に捉えている。またハンスが勉強している時の喜びをあえて五ヶ所抜き出し、第四章第三節のまとめでは「でも、ヘッセはどんな時でも、どんなに自分が苦しく悲しい時でも、自分に対してはまじめな人ではなかったかと思うのです。P119、126」とヘッセをまじめな人としている。肯定的な、理性的な、まじめな読み方そのものが、作品の読み取り方にも展開されていくのである。「読むこと」が「書くこと」を規定する。「読むこと」と「書くこと」の連関がここにも成り立つのである。

3 H子の場合(第二回提出のもの)

提出論文題名は「——現代版——枕草子」である。個性は強いが学力テストの成績はあまり良くない。「おわりに」の中から、

当初の頃、「卒論なんてそんなめんどうなもの書きたくない。」と、がんばっていた私ですが、こうして今書き終えてみると、やはり書いて良かったという気持ちでいっぱいです。学生生活最後のまとめとして、卒論を取り上げて下さった先生に篤く感謝するしだいです。このように長い文も、もうこれからはおそらく書くことはないでしょう。良い記念としたいと思います。(P57～P58)

H子(注3)は右の文章からもわかるように最初「卒論なんて書きたくない。」と反抗していた生徒である。「今まで読んだ本の中でいいなあと思つた本は何。」との私の間に、「枕草子」と答えた。「それで書いてみたら。」と提案したのだが、あまり気のりのない態度で研究室を出ていった。二学期のある日、H子は「先生、現代版枕草子でもいいですか。」と言つて来た。「二、同じことなれども聞き耳異なるもの、三、すさまじきもの、四、人にあなづらるるもの、五、にくきもの、六、心ときめきするもの、七、過ぎにしかた恋しきもの、八、心ゆくもの、九、あてなるもの、十、にげなきもの、十一、おぼつかなきもの、十二、たとしへなきもの、十三、ありがたきもの、十四、あちななきもの、十五、こごちよげなるもの、十六、ものあはれ知らせ顔なるもの、十七、めでたきもの、十八、なまめかしきもの、十九、ねたきもの、二十、かたはらいたきもの、二十一、あさましきもの、二十三、くちをしきもの、二十三、はるかなるもの、二十四、見ぐるしきもの、二十五、言ひにくきもの、二十六、常より異に聞ゆるもの、二十七、絵

に描き劣りするもの、二十八、描きまきりするもの、二十九、あはれなるもの、三十、いみじう心づきなきもの、三十一、わびしげに見ゆるもの、三十二、暑げなるもの、三十三、はづかしきもの、三十四、むとくなるもの、三十五、はしたなきもの」とH子は三十五のもののはづくし現代版枕草子(62ページからなる)を書き上げたのである。その一節を引用すると、

(三) たゆまるるもの

試験過ぎたる後の授業。いと寒き日のそうじ。(P19)

(五) にくきもの

(前略) 終業ベル鳴りし後も、生徒にかまはず授業を続ける教師。(中略)

計画を組みし後の用事。あらかじめ計画をしかと組み、それに基づき行なはむとする矢先、ふいに「今日は、何々があるから、授業終わりし後に、どこそこへ集まれ。」など、言はれたる時は、「折角の計画も水の泡となり果てし。」の感あり。いざ集まりてみれば、たわい無きことはなはだしく、時は刻々と過ぎ去り、我が心は増々いらだたしくなりゆく。せめて前の日に知らせられて居れば、計画のたつようもあるものを……と、おもしろくない事おびたし。(P210～P228)

私の形にはめ込まれることを嫌つたH子の批評精神が、そしてまた清少納言の批評眼、鑑賞眼が、H子の心を通してそのまま「現代版枕草子」には息づいている。学校や教師という体制に順応できな

いH子はそれらを批評することによって救済される。この論文の初めの方に学校や教師に対する批評が多く、そのことによって彼女は浄化され、論文が進むにつれて情趣深い所や、彼女独特の細やかな心遣いなどが表われてくる。H子は「枕草子」から批評精神や鑑賞眼を学び、その文章スタイルを学び得ている。

同じ「枕草子」を対象作品として選んだO子(注4)と同じ「すさまじきもの」について比較してみると、

△H子の場合▽(三) すさまじきもの

いと下品なる者のしやれた姿。年端もゆかぬ子のめがね。常日頃、苦虫かみつぶしたがごとき人の優し顔。(以下略)(P17) 77~110

△O子の場合▽

二三段「すさまじきもの」では、(中略)除日の時の人々の様子はおもしろい。(中略)人間のあさましさ、愚かさがよく描かれている。(P18) P110~1946

H子の個性読みの方が生々としている。生き方そのものが読み方になり、読み方が作品の読み取り方にもなり、論構成、叙述をも生み出させるということがこでも言える。

4 「源氏物語」感想文の中から

学校教育という場で「論文を一度も書かないで卒業していくことはかわいそうだ」と思って、就職希望者にのみ論文を書かせようと

した私の試みは、ここでその対象を抜け、授業に即した指導となったのである。「母子の別離(薄雲)」で、C子は「悲しい強さ」と題して、

明石の君という女性は不思議な人だと思う。彼女の持つ雰囲気は弱々しい、自分自身の存在というものを強く押し出すことのできない人であるからつかまえていないとすうと身をひいていってしまうような感じさえ与える。(中略)明石の君の徹底した自己否定は、時代の身分差別へのあきらめが長い間にそうさせたものか、あるいはそういう時代に生きなくてはならなかった彼女が、ことあるごとに傷つくの恐れて本能的に、積極的な自己否定にでていった防護策であろうか。

女は自意識が強いとよくいわれる。(中略)それなのに明石の君は自分を卑しい身だという。わずかに「口惜しき身」という言葉に、自分を卑しい身分と決めつけて取り扱う源氏に対しての抗議がみられるが、いかにも弱い気がする。

しかし、その自己否定が逆に彼女の強さにもなっているようだ。(中略(六条御息所、紫の上などのことを述べ))彼女達にはあきらめというやわらかい強さがなかった。(中略)涙のひとつぶごとに、ため息のひとつごとに、悲しみを送り出して、あきらめの中に時にまかせて生きてゆく。明石の君は、そんな悲しい強さを持っていた。(以下略)

授業での「読むこと」の指導においてここでは、「明石の君という人をつかませる」「紫式部と明石の君との関係を考えさせる」を

中心にし、明石の君の心の動きに重点を置いた。その指導がC子の明石の君の持つ悲しい強さの感想文となったのである。「口惜しき身」についても、「何か、かく口惜しき身のほどならずだに、もてなしたまはば。」の明石の君のことは、「何か」の下の省略、「かく」の指す内容、「口惜しき身のほど」にこめられた明石の君の心、「だに」の用法、それを使った明石の意図、「たまはば」の下の省略などを授業で考えさせた結果のものとと思われる。しかし、C子の表現力の確かさは明石の君を徹底的に見つめた結果である。

生徒提出感想文は、この「母子の別離」をとりあげる部分から一文の長さが長くなる。教科書において、ここから一文の長さが格段に長くなるからであろう。生徒たちは自然に教科書の中に引き込まれ、その文章スタイルまで体得していくのである。

C子の「悲しい強さ」はまだ感想文の域を出ていないが、それは授業の読みの姿勢に起因していると思う。第三部で、各自比較的自由な読み取り方をさせると、多くの生徒が論文らしいものを提出した。C子も「精神の快樂」と題して、大君とアリサとの比較、三島由紀夫の「死によって自分をこの世から抹殺し、人の心に永遠であるうとする（C子は彼の死をこう解釈している）」という考え方と大君の死との比較などから論文たり得ている。

同じ第三部から、論理的な内容の濃い論文になっているN子のものをとりあげることにする。最初に「薫と大君、薫と浮舟との二組の愛の形を考察してみよう。」と論題を明示し、以後はそれに従っての叙述である。「薫と大君」では、求愛と拒否という対立を超えて、二人の心は同質であり、精神はかたく結ばれていたとする。「薫

と浮舟」では、浮舟のみ自殺の行動に出ることができた（これは彼女独自の発見と言えよう）ことに対するなぞをといっている。その解答を、浮舟の母の過保護な教育と宇治という世界への貴族たちの支配力の限界に求めている。宇治の世界は完全な支配下にあるようにいながら実際の支配はもつと下の人々の手にあるとしている。そして、貴公子たちが自分というものに目をくらまされていること自体への作者の批判の投げかけととり、紫式部にまで問題を広げている。作品論が作家論にまで発展しているのである。

また彼女独自の発見「浮舟という女性は、この物語においてただ一人の、自ら死を選んだ人物である、多くの登場人物の中で、この女性のみがどうしてそれが可能であったのか。」は、授業で、「冷泉帝のみどうして後継に恵まれなかったのか。」の読むこと、そして考えることの学習が生かされていると思う。

四 結果の考察

結論として「論文を高校生に書かせることができる。」という仮説は一応証明されたわけである。生徒は論文を書くことにより、自分独自の読みと文章スタイルを持つに至った。対象が他の「読むこと」や「書くこと」になっても、きつとその学習の転移はなされることだろうと思われる。論文を書くという、個に徹することにより、「読むこと」「書くこと」全般への広がりが出てきたのである。断片的に多くの作品を教える方が、生徒個人としての飛躍があるのではなからうか。

また、全体の指導を通じて、生き方そのものが読み方になり、読み方が作品の読み取り方にもなり、論文の構成、叙述(表現)をも生み出させることができる。「読むこと」自体が「書くこと」に連関して行くのである。M子、S子、H子の作品分析の所でも触れたが、源氏物語についてもそのことは言える。読みは授業において同一の読みの形態をとらせたが、私の授業における読みの姿勢が、生徒の感想文を規定しているように思われる。しかし、授業での読みはかなり緻密な読みとなるので、それがまた生徒の着実な読み、思考、表現を生み出させ、きめ細かな論文、即ち、独善に走りすぎない定着性のある論文を生み出させているのである。第一、二回の指導は、生徒にかなり負担を与えたが、就職していくということもあり、それはそれなりに良かったと思われる。が、第三回目において初めて、今までの指導の反省の上に立った「読むこと」と「書くこと」の関連学習の成功を見ることができた。第三回目の指導において、指導に伴った感想文、論文ともなり、即ち、源氏物語第一部あたりでは感想文の域を出なかったものが、第三部では論文となりえている。ここでは、第一、二回の指導のように、形を先に明示するということはしなかった。だから、源氏を読んでいく過程において、読みの深まりが思考の深まりともなり、論構成のしっかかりした文章を生み出させたのである。

以上、この指導目的「①卒業論文(構想のしっかりとした長い文章(実際は四百字詰原稿用紙三十枚)百枚、平均五十枚程度であった)」を書かせること。②読むことと書くことの関連を密にさせる。」は達成されたと思われる。

次に付随的目的「③書くことの厳しさと喜びとを体験させること。④書くことによって自己を見つめことばを見つめて、自己の内面的飛躍を生み出させること。」について考察する。S子の「あとがき」や、H子の「おわりに」の引用文の中に、書くことの厳しさと喜びとの体験は表わされている。S子やH子だけでなく、ほとんどの生徒の「あとがき」の中に、その気持ちは読み取れる。また、「書くこと」によって自己を見つめことばを見つめて、自己の内面的飛躍を生み出させること。」の目的達成もなされたと推察できる。源氏物語の段階的な読むことと書くことの関連指導において、第一部あたりでは、表現(ことばを見つめること)に重点を置いていた生徒が、第三部では、読みの深まりとも相まって、自己を見つめ、自己の内面的飛躍を生み出し、思考の深まりをも生み出し得ている。

次に、指導上の問題点を列挙していくことにする。形ができあがらないと満足できないという生徒の実態もあり、第一、二回の指導では、ある程度表現の形を明示した。カード法なども、カードの取り方からその扱い方まで教えたので、生徒自身に考えさせるという過程を大切にしなかった思いもする。「——現代版——枕草子」などは、形から内容に迫る指導の限界と、偶然にも生徒がそれを乗り越えてくれたものとして、高校生の思考形態の柔軟さとを示している。大学の論文では考えられない自由さがあり、高校における書くことの指導の可能性の拡がりをも感じさせられたものである。しかし、多くの生徒に短期間にある程度のもを書かせるためには、一、二回目の指導のような場合においては形から内

容への指導はしなくてはならないことのようにも思われる。幅を持たせた形から内容への指導が必要とされるのである。

形を示す場合、第一回目では、私の1「かげろふ日記」における時の推移のあらわしかた（昭和44年11月20日「国文学攷」記載）2（評論）V中原中也論（当校文芸部誌「ながれ19号」記載）3平安時代の女性日記文学の精神——「かげろふ日記」「和泉式部日記」「紫式部日記」（当校文芸部誌「ながれ20号」記載）を論文の一例として示したが、第二回目からは私のものと前回提出の生徒の論文を示した。二回目の方が、よりスムーズに論文に生徒は取り組むことができたと思われる。身近かなものの例の方が親しみやすいであろう。

次に、対象作品については、作品とその生徒の個性が合致したものでなければならぬ。「真夏の孤独——和泉式部日記」のM子。また源氏の感想文におけるC子も、自分とは肌合いの違う若紫の巻ではかなり苦勞している。高校生はまだ充分に批判力ができていないので、その作品を自分の中にすんなりと受け入れて書く方が書きやすいであろう。

一、二回目の指導で、生徒の第一次感想に批評を書いて返すという指導はしないで、個人面接の話し合いによる指導をした。その方が、生徒はまだ確かな表現力を得ていないので、書いた内容とそれを読み取る側のくい違いなどもわかり、内容をも発展させることができる。指導にかかる時間もはるかに短くてすむ。書くことと話す、聞くことの関連学習でもある。

前に、提出論文と学力テストとの評価の相関関係に触れ、決定的

なものを得られなかったと書いたが、そのこと自体に意味があると思う。個性の強いM子（真夏の孤独を書いた）、H子（現代版枕草子を書いた）などは自分の好悪を強く出すので、他の全般にわたる教科の勉強や、国語においても全般的な学習ができない生徒だと思う。そういう生徒を生かしていく上でも、この指導は意味があるのではないかとも思われる。

生徒提出論文は総じて各章間の関連が薄いということがいえる。物事を体系的にとらえていく姿勢をこれからの指導ではさせたいと思っている。

最後にこれからの課題、提案を述べることにする。近ごろ、私は、単元学習に疑問を持ち始めている。五十七年度から適用される指導要領で古典Ⅱがなくなるが、結論の所で述べたように、このような科目を残してほしいと思う。断片的に多くの作品を教えるよりも、個に徹した方が、生徒の内面的飛躍の質は高い。「現代文」「国語表現」「古典」の指導において、この論文指導から得たものを生かしていきたいと思う。

別の課題として、近年大学入試において、論文形態の出題が重視されてきている。特別の受験指導は行われなくても、この論文指導において充分対処し得るであろう。

五 おわりに

この実践指導は静岡県教育研究奨励賞を受けたものである。ここに寄稿するにあたり、静岡県西部国語教育研究協議会のために来静された野地潤家先生のご指導を受けた。さらに広瀬節夫先生よりご

教示をいただいた。深くお礼申しあげます。

注1 高等学校における 表現指導の理論と実践 大矢武師 瀬戸

仁 明治書院 P116/13

注2 ことわり書きのないページ数と行数は、生徒提出作品のそれである。

注3 三年生になってはじめて教えるようになった生徒である。

注4 ごく普通の平均的生徒であり、その論文も平均的なものである。

(浜松市立高等学校教諭)